

役場前広場に設置された5本の大松明が夜空を焦がす。かねや太鼓の音が入り乱れ、火の粉が降り注ぐ中を勇壮に乱舞するキリコ。祭り1日目のクライマックス。

能登が燃える

PhotoReport / 4-5. JUL.

あばれ祭

奉燈



宇出津あばれ祭のキリコ(奉燈)の数は約40本を数える。灯りがともり、宇出津港に浮かび上がるキリコは風物詩となっている。
【写真の説明】①4日午後、各町内のキリコは榑木海岸に集結し、夜の大松明に備える。
②③欠かせない笛や太鼓。近年は女性の活躍が祭りを盛り上げている。
④祭りには全国から多くのカメラマンが訪れるが、中にはスケッチを描く人も。



神輿

祭り2日目は、2基のあばれ神輿が海や川の中、松明の下で壊れるほどの大暴れをする。神輿が暴れる理由は、八坂神社の祭神である牛頭天王ごすてんのうを呼び寄せ、喜ばせるためと考えられている。

【写真の説明】⑤榑川上流の大松明の下で暴れる酒垂神輿。このあと、八坂神社境内でさらに暴れて入り宮する。⑥漁協横で海に落とされる神輿をカメラマンや見物人が見守る。⑦雨のように降りかかる火の粉をものともせず暴れる白山神輿。⑧入り宮した神輿。激しく暴れたあとの静寂のとき。

祭りの向こう側

「祭りの國」と呼ばれ、1年を通して多種多様な祭りが行われている能登半島。

その中で、最も盛大、勇壮な祭りである「あばれ祭」は何がすごいのか。

宇出津地区の神職2人に、祭りの向こう側を聞いた。

能登半島と祭り

加藤 能登半島にはキリコ祭りのほかに、鶴川や姫、小木などの行灯（袖キリコ）や中島の杵（きね）旗（はた）祭りなどに代表される「旗の祭り」などいろいろな形式の祭りがあります。その時代時代に、地域が祭りを選択してきたといえます。

能登では子どもからお年寄り、さらに犬や猫まで祭りをしています。家中の人が祭りにかわかることは神様にかかわることであり、これほど祭りに一生懸命になる地域は全国を見てもどこにもありません。だからこそ能登半島には悪いものが入ってこないのだと信じています。

棚木 旗祭りは朝鮮の文化を色濃く残す祭りです。能登半島の文化は、朝鮮と北前船が強く影響しているということが祭りからもいえます。

祭りについて、農家を例に挙げると田植えが終わったころの春祭り、豊作を祈る夏祭り、収穫を祝う秋祭りがあり、漁師であれば、漁に出る前の祭り、帰ってきてからの祭りがあります。昔の人は一年のサイクルの中に祭りという特別な日を作って、楽しんでいただのだと思います。

あばれ神輿の迫力

棚木 白山神社の神輿は町内回りに普通の神輿を使い、祭り二日目の夜に神輿をあばれ神輿に移します。神輿の先導は「お祓い箱」と呼ばれる小さな箱が務め、町内回りでは1軒1軒の家に無病息災や商売繁盛などを祈願しています。普通、神輿の先導は天狗様である猿田彦が務めますが、宇出津だけは昔からこの「箱」が先導するのです。二日間である祝詞は200回以上でしょうか。宇出津の町の発展を願いながらお祈りしています。あばれ祭が終わると1年のほとんどが終わったような感じがするほどです。

加藤 酒垂神社の神輿は、一日目からあばれ神輿で巡幸します。町内ごとに家々を回りますが、途中道路に落ちたり海に落として暴れたりしながら、二日目の夕方にお旅所（漁協横）へ、夜9時から八坂神社に向けて巡幸します。

わたしたちは八坂神社の入り宮まではまったく気が抜けません。神様である神輿、氏子の思いを乗せた輿人足、そして自分たちが一体となって宮へあがっていくというあの感覚は、ほか

「祭りは能登人の生き方そのもの」

酒垂神社宮司

加藤三千雄さん (55歳・宇出津)

かとう・みちお

の祭りにはありません。これだけの祭りをもつことができるということは、神職として最高の幸せです。良い祭りがあるということ、良い氏子を持つということと同じことです。だからこそあばれ祭はすばらしいのだと思います。最後の瞬間まで神人一体となる祭りはそんなにあるものではないですね。

祭りの感覚

加藤 祭りには、神様を大切にしたいという思いが込められています。能登人の生き方があります。日常とは違う「祭り」に意図的にかかわっていきこうという意識があります。能登半島には神様が息づいているとわたしは思っています

「町の発展を祈り続けたい」

白山神社宮司

棚木重忠さん (50歳・宇出津)

たなぎ・しげただ

ただ最近人が減ったということもあり、日程をずらしたり、減らしたりする地域もありです。祭りは人があつて初めてできるものであり、そこには能登の人の祭りを残していきたいという強い思いがあるのではないのでしょうか。

あばれ祭の魅力

加藤 数ある能登の祭りの中でも「あばれ祭」の形式は、一般的なキリコ祭りの枠を越えていると思います。全国的に八坂神社の祭りというのは荒い祭りが多いわけですが、宇出津ほど暴れる祭りをわたしは知りません。スサノオノミコトをまつる八坂信仰は、江戸中期に北前船の隆盛とともに全国に広がりました。宇出津の神輿が暴れる理

由には、暴れ神であるスサノオノミコトの神意にかなうという説がありますが、神道神学的には、神の世界を追われ、食べるものや住む場所もなく、各地でいじめられているスサノオノミコトを表現しているという説もあります。とちうの説にしても、悪いものを内に入れない。退治して病気を治すという点では共通しています。

あばれ祭の手伝いをお願いするほかの神職からもよく「大変な祭り」といわれ、「あばれ祭りができれば県内のどこでも祭りができる」ほどのハードな祭りです。先人たちが築きあげたあばれ祭は、全国のどの祭りと比較しても遜色ない祭りであり、イベント化した祭りとも一線を画するものだと思います。

棚木 あばれ祭の時期は、一年を通して気温・湿度が最も高く、疫病が発生しやすい時期でした。当時は子どもの20歳までの生存率は5割程度といわれており、昔の人にとって、いかに疫病を退散するかということが、大変重要なことだったのです。また、あばれ祭は宇出津の人にとってエネルギーを発散させる、年に一度の特別な日でもあると思います。

し、そう感じる人も多いと思います。特に宇出津の町は、祭りが近づくとき町の「気」が高まっていくのを感じることがあります。こういう感覚を持つことができていくこと自体が、とても幸せなことだと思います。

棚木 わたしは、能登の人口が減少しても、一人でも多くの人に祭りに参加してもらって、見物してもらって、町の発展と一緒に祭りも発展していったほしいと願っています。(7月19日、酒垂神社にて)

【取材を終えて】

能登の貴重な文化であり宝物である祭り。しかし楽しむだけが祭りではない。この伝統を守り、次世代につなげるためには、現在祭りをうわしたたちが祭りの奥の意を感じることでできるか、その感覚を研ぎ澄ませる全体で祭りを築き上げていくか。あばれ祭だけではなく、すべての祭りには意志があり、感覚がある。

自分たちの祖先が築きあげてきた自分たちの地域の「祭りの向こう側」を感じたい。